

## 意見報告書

平成 23 年 10 月 25 日

(株)地球環境秀明

任意整理代理人

弁護士 倉田雅年

事務補助 渡邊澄雄

先ず全般的な(株)地球環境秀明の設立から今日までを概観しますと、初動の 5～6 年は無借金経営で、開発に専念しているため、経費も少ない状態で推移しています。その後上場を目指してバイオリサイクルの開発と高嶋博士のオリジナルな技術の用途の開発を行ってまいりました。その後の銀行の資金の運営から MU ハンズオン(株)の武田康家氏（以下、武田氏といいます。）の勧めと指導により、銀行資金より市場資金により事業の展開を図り、ベンチャーキャピタル企業の要望に応える体制と事業内容を推進することを行ってまいりました。しかし、売上げのマーケティングとスキームとプログラムの指導と推進が少なく、MU ハンズオンの武田氏を中心に監査法人トーマツの推薦された望月徹氏（以下、望月氏といいます。）が経理・財務本部長となり、武田氏推薦の古金千明弁護士（以下古金弁護士といいます。）の契約及び経営の開示と、会社運営にあたっての内部のスタッフの掌握を強化されましたが、一向に売上げは上がらず、その上 MU ハンズオンから副社長に永田俊裕氏を推薦し、会社の運営強化として、MU ハンズオンの武田氏と古金弁護士の指導のもと武田体制をすべての会社運営に推進していきました。ベンチャーキャピタル企業としての指導により武田氏を中心とした社内の組織化が図られ、発展が望まれましたが、売上げが以前より悪くなり、会社経費は以前の 3 倍～5 倍に膨れ上がっている事実が窺えます。

尚、平成 22 年の日本ウエストーンと下水道汚泥についての件で、逮捕事件となり、(株)地球環境秀明の多大な信用を失墜させていますが、この一ヶ月前に社員の解雇計画と会社の自主倒産の計画が武田氏を中心に上記のスタッフにより推進されていました。この前後を考えると不可思議なことが多くあります。

事件後、当方の検察・警察・マスコミの情報によると、内部告発と悪意に満ちた情報により、マスコミの方にも悪意の情報を流し、すべてが意図的に事件と逮捕と報道がなされたことを関係各位からの事情聴取によって把握しております。岐阜の日本ウエストンの報道は、誤報道であり現在も高嶋博士の複合発酵の技術によって 100%処理をしており、日本ウエストンの経営者は、報道の否定と悪意に満ちた内容と内部の会社倒産のための一撃であったことを認識しております。

任意整理の進行とともに事実関係が明らかになってきており、ベンチャーキャピタル投資が行われた平成 21 年 5 月頃から急速に経営悪化が起きており、その後の売上向上と会社運営は発展なく、一切推進されず、自主倒産の方向に最後は向かっており、とてもベンチャー企業援助とは言えない事実です。

私は今日、高嶋博士の顧問弁護士として当地球環境秀明の任意整理代理人弁護士としてこの素晴らしい科学技術を世に輩出させ、世のために育てることより僅かな金でこの大事業を運営しようとしたベンチャーの資金と指導を疑問視しております。ご希望の決算書と経理書類は同封いたしますが当職の見解と立場から事実の開示と解析を致した次第です。

このような事実からベンチャーキャピタルの投資と指導とは見れない疑問点を拾い出してみますと下記のとおりです。

## 1、顧問弁護士経費について

武田氏の推薦による古金弁護士の業務の内容を開示してみますと、とても顧問弁護士としての実績とは思われない行動と発言があります。上記から平成 22 年 1 月までのわずか 1 年半の間に弁護士経費だけでも 2,500 万円が計上され、支払われております。1 ヶ月で 1,000 万円を超えた月さえあります。

何の弁護士費用かと調べますと、ミーティング経費が大半で、裁判費用・事件の費用はほとんどなく、地球環境秀明の弁護よりも、MU ハンズオンの武田氏と副社長の永田氏の意見を重んじていた疑いが強いのです。弁護士は顧問弁護士として経費を計上しているのですから、会社の利益でなく、他の利益を図ったということになれば、顧問弁護士として非常に疑問が出てくるどころです。

今後上記経費内容の追求と地球環境秀明の顧問の立場の逸脱と武田氏・永田氏との関係との軽重について(株)積水インテグレートドリサーチの小林俊安前副社長（以下、小林氏といいます。）と同社の山路克彦部長（以下、山路氏といいます。）の証言からもこれらの発言について義憤の念に駆られます。本来なら私も衆議院議員在任中、法務委員会の委員長を務めた経験もあり、法曹の立場から懲戒委員会に値するような危惧があります。このことをご注意申し上げておきます。

## 2、監査法人トーマツとの契約と望月氏の経理・財務部長の就任について

監査法人トーマツとの契約は、MU の武田氏の指導で、上場のための資料作りと経営開示に必要として優先して締結されました。

売上げが上がらない状態なのに、多大な経費を支払い、尚、経理・財務部長に望月氏が派遣され、売上げよりも経費過剰が生じ、会社の経営の原理が転換され、すべて経費優先となっていたのです。望月氏を推薦したのは、トーマツと武田氏で、会社管理の名を借り、従来の社員を統括して社員全体が望月氏と(株)善都から派遣された金子泰史氏（以下、金子氏といいます。）と MU から送り込まれた永田副社長の指示を受けて、会社管理体制優先に組み込まれていたものです。

望月氏は退社する平成 21 年 12 月の一ヶ月前まで高嶋酒造の顧問税理士である堀内進税理士（以下、堀内税理士といいます。）の事務所に日参し、上場するために高嶋酒造(株)に(株)地球環境秀明から金銭の貸付があったような書類の作成を依頼してきましたが、堀内税理士は、いくら上場のためとはいえ、ありもしないことはできないと思いましたが、上場の手伝いと言われ、高嶋酒造が地球環境秀明に 30 年間の開発費を貸付けたという契約

と担保の設定がありましたのを解除してほしいと要請され、それには応えておりました。堀内税理士は、上場のための協力だと思っていましたが、その翌月に望月氏は退社し、その後自主倒産の経緯が明らかになった時点で、武田氏、永田氏、古金氏、望月氏、金子氏が経理と財務の開示と精査という監査法人の信用を逸脱した人事の配置と結果を生じていることが堀内税理士の証言とそれに関わる銀行の担当者と話した結果、大きな疑問と義憤の念に駆られております。

### 3、永田副社長について

MU ハンズオンの推薦と武田氏の指導で、永田氏が副社長に就任しました。当初は売上向上と資金調達とライセンス契約推進のスペシャリスト、プロフェッショナルとして会社運営の危機回避のため永田氏が投入されましたが、何一つ契約・売上につながらず、給料は月 120 万円、その他自宅を使用しているのに家賃 30 万円が計上され、さらに一般経費がかさみ売上・契約が伸びない状況にもかかわらず多大な経費の負担を強いられた状況でした。これは期待外れというよりも背任的な部分が窺えます。まず、①在任中の仕事ぶりに問題があり、②退職する際に、役員会も開かず自分で平成 22 年の 3 月 25 日に退職届を法務局に提出しています。③平成 21 年の 12 月頃から、契約先及び代理店並びに客先に対し、(株)地球環境秀明の倒産と閉鎖の話をしており、この件に関しては、私が後日任意整理のために回った先から、「先生は管財人ですか」という馬鹿な質問をされたので訳を聞くと、永田氏を中心に望月氏らから倒産の話が出ており、これは背任行為に他なりません。現在でもそれら相手先の 80%以上は理解してくれ、当職との契約の引き継ぎ等が続けております。

以上のように永田氏が会社を辞める前、在任中のことから開示・精査してみると、疑問と不可思議と義憤の念を感じるものがあります。小林副社長から、永田氏と武田氏・望月氏との飲食の際に会社の倒産劇、高嶋酒造の乗っ取り劇、別会社の設立の件などが出ていたということを知り、非常に遺憾に思っています。

### 4、会社経営の私物化等

岐阜県の日本ウエストンの処理と兵庫の公共下水道処理について事実を逸脱する情報を内部からマスコミ・検察・警察・行政に流し、地球環境秀明と高嶋博士を産業廃棄物処理法違反で内部告発し、逮捕に至り、高嶋博士の名誉棄損・信用棄損及び業務妨害を発生させたのです。これは一連の自主倒産の最後の場面で逮捕・起訴により事実の隠ぺいと報道による高嶋酒造の乗っ取り劇が露呈したものです。このことは事実と証人・証言で明らかではありますが、会社内部のすべてを永田氏、武田氏、望月氏、金子氏他社員が急速に接近してなされたことです。高嶋博士と信頼関係にある積水インテグレート取締役の元副社長の小林氏、現部長の山路氏からもこれらの全情報を聞いており、得意先、契約先、代理店、金融機関、高嶋酒造顧問税理士などから聞き取った情報によって、周知の事実です。

尚、ベンチャーの上場の可能性を流しながら、責任を博士と酒造に背負わせようとした

形跡もあります。これこそ背任行為ではないでしょうか。結局表向きはMUハンズオンの武田氏の考え方が上場目的ということであらゆることを行い、地球環境秀明の高嶋酒造に対する担保設定の取消をはじめ、自主倒産と乗っ取り的な行為があったと思われます。ありとあらゆることを永田氏、武田氏、古金氏の指導のもとで行ったという疑念が生じます。結局は倒産に誘導したものと思われます。堀内税理士が随分おかしいことを行うと感じたことから上場もできないのに上場に託けて無理やり実行したものと思われます。

現在は高嶋博士の科学技術を上場企業、世界の政府・行政が推薦し、今回の東日本大震災の放射能汚染土壌の浄化等で高い評価を受けており、結果として高嶋博士の科学技術は本物であることが明らかになってきました。上記のようにベンチャーとして博士の科学技術を利用しようとした武田氏、永田氏、古金氏、望月氏、金子氏と社員たちと博士の縁が切れたことにより博士の実力が明確になり、世界中から期待されてきているものです。この事実から見て、MUハンズオンの武田氏の考え方と指導は、とても博士の科学技術の理解に及ばず、単なる一部の資金と一部の運営知識により会社の運営の行き詰まりと事実を逸脱してしまったのではないのでしょうか。本来のベンチャー支援は、一部資金の導入という株の操作と利益ではなく、企業と技術を育てることであるという本分を忘れた一つの見本だと思います。